

ファッションを通じた日・西の国際文化交流と 地域文化発信の実践的研究

－ ナバラ州における‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’を事例として －

A practical study of an international cultural exchange between Spain and Japan through Fashion Show and Local culture dispatch of Yamaguchi ; ‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’ in State of Navarra as an example of Fashion Show

代表 水谷由美子* Yumiko Mizutani
入江正敏** Masatoshi Irie
永富真子*** Mako Nagatomi

Keyword : sister cities, an international cultural exchange, a cultural exchange between Japan and Spain, Navarra State University, Yamaguchi Prefectural University, Fashion show, Dispatch of Yamaguchi local culture , a practical study

1 はじめに

山口県立大学が位置する山口市とナバラNavarra州の州都パンプローナPamplona市は、宣教師フランシスコ・サビエル (Francisco Xavier, 1506-1552年) の縁で、すでに姉妹都市として長い交流の歴史を持っている。サビエルが日本で公式にカトリック布教の許可を得たのは山口の大名大内義隆公 (1507-1551年) からだった。それがきっかけで山口の名前はヨーロッパ史にたびたび登場することになった。山口の地域文化を語る場合に、大内文化の最盛期であるとともに終焉になったこの時期に照明を当てるのは、非常に意義がある。

2005年には両市の交流は25周年を迎え、山口市公式訪問団がパンプローナを訪問している。山口県はこのような文化交流の基盤の上で、ナバラ州との姉妹都市提携をそして、山口県立大学は2004年11月にナバラ州立大学と学術交流協定を結んだ。

筆者はすでに1996年以来、山口の地域文化をキーワードとして「サビエルと大内文化」に着目してきた。詳細な取り組みは後に述べるが、両校の調印式に来山したナバラ州立大学の教員および学生を歓迎するために、文化交流会が催されることになった。そこで、筆者は学生とともにファッションショー「山口 MEETS

ナバラ」で、サビエルと大内義隆公の出会いを象徴的に表現するとともに、ナバラの生活文化や芸術に着想を得た服飾作品を映像を交えて発表した。このショーに対する両大学の関係者の反応が非常に好意的なものであったことが、今回のナバラでのファッションショー実施に結びついたことは幸運であった。

その後、筆者は上記の公式訪問団に参加する市民から、訪問団に共通の衣装を制作するよう依頼された。訪問団はパンプローナがもっとも世界に注目されるサン・フェルミン祭の時期に訪問することが決まっていた。この祭りはアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961年) の『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926年) の舞台になったことで世界的に有名になった。特にこの聖人の祭りの期間に毎朝行われる牛追い、エンシエロEncierroには国内ばかりか国外から多くの男性が、勇気を試すかのように参加しにやって来る。この模様は日本でも毎年報道されている。

筆者は1999年にサン・フェルミン祭のフィールド・ワークをしている。また、2002年にも再度、訪問し以下のような服装が特徴だと理解した。1970年代頃からこの祭りは形式が整い始め、人々の服装もはっきりとした特徴を表わすようになる。老若男女に関わらず、皆が全身真っ白な服装になり、首に巻く赤のスカーフ

* 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授

Professor of postgraduate school of International & Cultural Studies at Yamaguchi Prefectural University

** 山口ケーブルビジョン株式会社編成制作局長

Director of News & Production Div.at Yamaguchi Cable Vision Co.,Ltd.

*** 山口県立大学大学院国際文化学研究科2年

Student of postgraduate school of International & Cultural Studies at Yamaguchi Prefectural University

と腰に巻く赤のサッシュベルトがアクセントになっている。スカーフの背に垂れた三角の端には、必ずパンプローナ市カナバラ州あるいは市民の任意グループの紋章が刺繍されている。市民グループの衣装には、青や黒の上着を共通に着ている場合もある。こうした服装調査を基に、今回の訪問団の衣装デザインには、皆がこの祭りに適合しながらも、山口から来た訪問団であるという存在感を示せるように考えた。

そこで、サビエルの訪日以降に日本で流行した武将の服装である陣羽織に着想を得たベストをデザインし、色は赤で背中と前中心の折り返しに大内氏の家紋である大内菱を金色でプリントした(写真18)。赤の上に金色は艶やかな印象を与える組み合わせである。帰国後に山口市観光課の担当者や訪問団の市民から、現地で非常に目立ち、交流のきっかけ作りに非常に役立ったという評価を得た。多くの参加者がパンプローナの人々の要求に応じて、プレゼントをして来たようだ。

今回もモデルや訪問先の要人へ上記と同様の金の大きな大内菱がついた赤と黒の地のTシャツを制作し、御礼として贈呈した。同様の家紋のデザインを通じて、山口の地域文化を象徴的に表現し、視覚的な情報が重なって行くことで、山口を強く印象付けることができるのではないかと期待している。

本題に戻すと、大学間の交流事業は2004年の学術協定調印式へのナバラ州立大学側からの訪問団受入れが最初である。ナバラ州では2006年にサビエル生誕500年の大事業を控えており、ナバラ州立大学でも関連事業を行うので、次年度は是非来てほしいというお誘いがあり、それが2005年に実現したのである。大学から筆者が派遣要請を受けたのが8月末であり、約3ヶ月間の準備期間を経て、11月11日から21日までスペインを訪問した。そして、交流の主要な目的であるファッションショー「Yamaguchi Meets Navarra 2005」を、11月17日にパンプローナ市では歴史と権威があるガヤレ劇場にて実施することができた。

今回のナバラ州立大学での交流事業には学長職務代理の猪又徹教授、講演担当の田村洋教授の二人と水谷班に分かれて訪問した。水谷班にはゼミ生である大学院国際文化学研究所2年永富真子と生活科学部環境デザイン学科4名が同行した。その他に地元マスメディアの2名が同行した。1名は山口ケーブルビジョン株式会社編成制作局長の入江正敏氏で、カメラマンとして活躍した。帰国後、入江氏は6日間のナバラ州立大学との交流を描くテレビ番組「サビエルの絆」を制作した(写真1～16)。そして、この番組は山口ケーブルテ

レビで12月中旬の1週間、1日3回、30分番組として放映された。大学関係者ばかりでなく市民からの多くの反響があり、姉妹都市への関心の高さが窺われる。特に、我々が山口ばかりでなく、海外でも山口の地域文化をテーマにしたファッションショーを実現したことを知って、興奮して感想を聞かせてくれた人もいた。今の時代は、山口から日本の都会を経ずして直接、海外の地域と結びついて行ける時代であることを広く地域の人々に理解してもらえらる機会となったのではないだろうか。

同行のマスメディアのもう1名は、読売新聞西部本社山口総局記者の細川紀子女士である。彼女は2006年に迎えるサビエル生誕500周年の特集のための取材をすでに始めていた。ちょうど偶然に我々のナバラ行きを聞いて、幸運にも彼女も同行して、我々の交流の様子を取材するとともに、現地にてサビエル関連の原資料を収集する機会を得たのである。彼女によるファッションショーの記事は我々がまだスペインに滞在していた、ショーの翌日の19日に、九州・山口版に掲載された。

大学とメディアとは報道に関しては基本的に主体と客体であるが、今回は外国での交流、調査ということもあり、相互に助け合いながら、それぞれの立場の目的を果たすことができた。マスメディアの同行をナバラ州立大学は我々同様の待遇でもてなしてくれた。ナバラ州政府、パンプローナ市政府そしてサビエル村の関係者は、サビエル生誕500年記念事業を、日本に向けて強くアピールするために、この2人に対して大きな期待を寄せた程であった。

交流事業を社会化してより市民的な広がりの中で具体化させようとするためには、マスメディアの力抜きには考えられない。メディアによる批判を恐れずに言うなら、活動とメディアによる発信は、対をなして実施されるように仕組みを作ることが常に課題である。

本稿は「ファッションを通じた日・西の国際文化交流と地域文化発信の実践的研究 — ナバラ州における「Yamaguchi Meets Navarra 2005」を事例として —」をテーマとして、日本とスペインとの交流、狭義には山口県とナバラ州との国際文化交流事業を通じて実践した研究活動を記述するものである。主に、研究代表である筆者は服飾デザインの立場から、研究の背景、動機、実施内容を記述し(4章-②, 5章, 6章以外)、永富は自身の作品創作について(4章-②, 5章)、さらに入江はテレビ番組制作者の立場から、当研究の実施とその意義について検討する(6章)。

舞台芸術やデザインの分野では、公演における観客、あるいはクライアントの存在がなくては成立しない。しかも、実践的研究として表現活動や作品の意義を検証するためには、観客やクライアントの意見を必要とする。そのため、一般にはアンケートや聞き取り調査などがされる。今回の研究手法の特異な点は、ファッションショー‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’を表現する側と、それを記録、観察そしてテレビ番組を制作する側が、同行して補完しあいながら、双方の研究・創作を実現させる点にある。

一般に、行為者は自己を検証することが難しい。今回は入江によって鏡のようにマスメディアの目で活動が刻銘に取材されたので、我々は自らの活動を客体化できる主要な資料を得ることができる。そこで、筆者は交流事業全体について行為の主体の立場、そして永富は主に舞台スタッフおよび服飾制作者の立場に立ち、自己の経験を検証するとともに、入江が作成したテレビ番組「サビエルの絆」を客観的な資料として参照している。入江はいかに自身のナバラ州との交流の実績を踏まえて今回の取材に当たっているかを述べるとともに、地域文化を支えるメディアの立場から大学間の学術交流への期待を述べる。

2 「サビエルと大内」に着想された服飾創作と発表の経緯

ファッションショー ‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’ の基本的な内容は、「サビエルと大内」をキーワードとする筆者の10年に及ぶ研究活動の集大成となるものである。具体的には1996年以来、「サビエルと大内」の関わりに着想源を求めたテーマを設定し、毎年ファッションショーを実施して来た。その間1999年から3年間は、産官学連携事業「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」において、「サビエルと大内」をキーワードにファッションや生活小物の商品開発をも実施した。

特に、この事業を立ち上げると同時に1999年度のジェットロ主催ミニ・L&L事業に応募し、小さな組織である山口文化発信ショップ実行委員会のファッション研修の計画が採択された。10名近い山口市民がミッションとして、パンプローナを訪問した。それがきっかけとなり、産学関係者による山口市とその姉妹都市であるナバラ州パンプローナ市との交流が始まった。

この訪問時にナバラを代表するデザイナーメーカーであるククシュムス社を訪問した。この会社はパンプローナ市で開催される世界的に有名なサン・フェルミン

祭と牛追いを主題として、3人の若者がTシャツを販売したことから起業され、今では世界進出を果たす企業となっている。我々の訪問の半年後、3人の若者のリーダーでありチーフデザイナーであるミケル・ウルメネタ氏を山口に招聘し、山口のキャラクター「ミッケル」や山口市とパンプローナ市の友好を表現したTシャツを開発した。

筆者は個人的な研究・創作活動で築いた関係を少しずつ温めて来たが、今回のナバラ訪問およびファッションショーでその関係に助けられた。ククシュムス社のウルメネタ氏にメールを送るとニューヨークから返事があり、パンプローナの営業統括を担うコルド氏を紹介されて、学生の企業訪問の受入れやショーのヘアメイクの担当者を決めてもらうなどの成果を得た。

筆者は「サビエルと大内」を着想源とするファッションショーや商品開発事業に携わって来て10年目に当たる年に、サビエルの故郷にて、今までの交流して来た人々に支えられると同時に、現地の教員、学生そして市民などと共同でファッションショーを実現出来たことは、大きな喜びであった。

1996年に山口中心商店街の特色となる「魔法の屋根」と呼ばれる球体のアーケードが完成され、そのこけら落としの事業として、筆者の企画が採択された。山口の市民との最初の交流事業が実現されてから10年間「サビエルと大内」をファッションショーの中心主題にして来た。その背景はすでに地域の文化関係者や街づくりに関心のある人々の関心が集まっていると判断したからである。当時、山口文化の世界に新参ものだった筆者は、山口に赴任して来て3年目にやっと、「サビエルと大内」の主題を見出し、その後の主要な研究・創作の対象として取り組むことになった。

山口市では大内文化による街作りや国際交流団体である「ナバラの会」によるサビエル関連の国際交流も年々盛んとなっている。また、「サビエルと大内」の主題は、山口市観光コンベンション協会主催事業にも取り上げられ、パンプローナの巨人人形に倣い、サビエルと大内義隆公の巨人人形を作成した。このプロジェクトでも筆者は人形を作成するところから関わり、衣装をデザインし作成した。何度かの祭りでその人形は行列をしている。

このように一研究室の関心事ではなく、サビエルと大内に関連する主題は、地域の国際交流や街づくりにおける市民共通の大きな主題へと成長して行った。特に2001年に開催された「山口きらら博」の準備の段階で、二井関成知事がナバラ州を訪問したことが契機と

なって、州と県での交流が始まったと言ってもよい。この博覧会のナバラ館には、我々が作成した人形も設置された。

この10年の間に山口商工会議所青年部の発起で、「日本のクリスマスは山口から」を主題として、山口提灯祭りでの提灯ツリーの制作、クリスマスイルミネーションなどが実施され、サビエルと関連させてクリスマスが新たな注目となってきた。筆者も同様の発想を持っており、上記組織と一部連携しながらクリスマスファッションショーを実施し、2005年度で4回目を迎えた。

以上のように、地域の問題意識と連動する、あるいはショーによって問題意識を投げかけつつ、「サビエルと大内」に関するファッションショーや創作的な事業を、産学や市民とともに継続して来たのである。まさに産公学の活動が紡ぐ交流の織物が、大学間交流においても具体的な姿を現し始めたのである。

3 'Yamaguchi Meets Navarra 2005'の準備

本論の主題であるナバラでのファッションショーを通じた交流に話を戻す。以下ではショーを実現するまでの準備を記すことで、異文化交流の難しさと意義を考える。

まず、今回のナバラ行きの提案は8月末にあった。その段階では交流の規模、内容などが未定で手探りの状態から、以後3ヶ月の厳しい準備期間が始まった。当所、ナバラ州立大学との連絡は、半年間ナバラ州立大学に滞在していた安溪遊地教授そして、途中からはスペイン出身の国際交流員アルベルト・ミヤン氏が担当し、筆者は多くを助けられた。

海外で事情がわからない中で計画を立てるほど、無謀で困難なことはない。かなり詳細な項目を立てて質問や依頼をしたが、それぞれの項目への的確な返事がなく、出発の直前まで不明な点が多かった。

特に敢えて言及するなら、当所、作品を45セットどのように運ぶかを考えるのも課題であった。郵送で船便、航空便さらにSAL便などである。また、手荷物として運ぶなどが候補に上がった。筆者は以前、航空便でTシャツを200枚程フィンランドに送り、関税で悩まされた経験があった。山口文化発信ショップ事業の中で、2000年にヘルシンキ市立美術館で開催される「雪舟とその弟子たち展」のミュージアムグッズとして、Tシャツを販売してもらおうというプロジェクトをした時のことである。

結局はナバラに持って行く作品点数は17点となり、

大きなダンボール2個と同行メンバーのスーツケースで運搬することになった。予想通りスペインに最初に入国したマドリッドの空港で税関に留められ中身をチェックされた。まず、第一関門として関税の心配をして来た。我々の服はナバラ州立大学でのファッションショー用のもので、販売用の商品ではないという説明をして、幸運にも関税を容易に通過することができた。マドリッドでの滞在后、パンプローナ入りをする事になり、今度は国内線でのチェックインで重量オーバー・チャージが問題となった。この心配を配慮してスペインでの宅急便サービスSeurを利用して、ダンボールだけをパンプローナのホテルに送った。このように作品の運搬には、さらに安全性、経済性などでかなりの神経を使った。

ファッションショーを海外で実施するためには、諸々のシステムが異なるために、以上のように運搬を始め細かな点に気を使う準備が必要である。ナバラ州立大学のスタッフにメールで、詳細なチェック項目を作成して送っていた。筆者の心配を余所に、現地のスタッフは送られて来た希望のリストのひとつづつを叶えるように努力をしてくれていた。それまで日本で感じていたストレスも、現地スタッフの顔を見て交流する中で、消えていった。異文化交流には、相手に身を委ねることそして相手を信じる事が重要なことだと了解した。そして、日本の常識やコミュニケーションの仕方を異国の人々に求め、完璧な結果を強いることがないようにすることがお互いのためになるとも理解できた。

準備の段階でもっとも困難を極めたのは、モデルとヘアメイク(化粧を含む)の担当者を探すことであった。ナバラ州立大学の中心的责任者であるホセ・ルイス・イリアルテ副学長に敬意を示すために最初に依頼をした。しかし、多忙を極め海外出張が多いイリアルテ氏からはなかなか返事が来ない。そして、やっと来たかと思えば山口から参加するスタッフだけで実施できるものをしてほしいということであった。当然、服飾文化に関する専門がないナバラ州立大学に依頼するのは、当所から難しいと考えていたので、この結果を聞いても驚かなかった。ただ、相手の大学にどこまで頼むべきか、あるいは独自の人脈で動いてよいものかという探りもあって、余計な時間を費やしたようだ。しかし、大学間交流において、行動のイニシアティブは相手側にあるので、相手の考え方を確認しながら行動するのは当然だと考える。

ファッションショーの規模に関しても、当所は45点

の作品を考え50分程度を提案した。しかし、おおよその構想を立て終えた後に、20分程度にしてほしいという返事が来た。そこで25点に作品点数を減らした。モデルのコーディネートは、安溪教授がナバラでの滞在中で知り合ったスペイン語の教師をしている松川仁美女史が担当してくれることになった。しかし、彼女からは「候補者はほとんど昼間は勤務あるいは授業があり、午後1時には集合できないので、誰も見つからない」という連絡が返ってきた。そこで予定を変更し、リハーサル時間を削減して急遽午後4時の集合にした。これが効を奏して、一期にモデルが決まったのである。しかし、結果的にはモデルの数を確保しきれず作品は17点になった。

モデルが17名と言っても、アーティストとの打ち合わせでは、午後4時からヘアメイクでは、絶対に時間が不足するので、モデルが昼から集合しないと不可能だと釘を刺された。そこで、ヘアメイクのアーティストから直接、松川女史に連絡を入れてもらうことになった。ショーの3日前に衣装合わせをしていた女性のモデルたちは、ショーに対するリアリティを感じたのか、ほとんど全員が正午から1時頃に美容院に集まってくれた。思わぬ好意に出会い、心から感謝した。

ヘアメイクのアーティストは、男性用と女性用で2名が推薦されていた。男性の方は、衣装合わせに来てくれたので、スムーズに希望を伝えることが出来た。しかし、女性用のアーティスト、イマニョール氏とはショーの前日に打ち合わせとなり、言葉も英語を話す友人を介してのコミュニケーションとなり、本番までの不安があった。ただ、デザイン画とヘアの希望を示す写真資料を作成していたのでそれを基本として、全体的には1作づつ細かなメイクの提案はせず、ある程度アーティストの想像力に委ねることにした。

それは意図的な依頼の仕方でもあった。しかしそれを理解していなかった学生が、自分のイメージと異なるメイクをされたと言って、メイクを取ろうとした。制作者と見る側、また日本人とスペイン人では同じものを見ても文化の違いから、異なった意味を感じることもある。学生とは少し激しく意見交換をすることになったが、そのような微妙な点を理解してくれたと思う。

筆者の場合には、ヘアメイクのアーティストにある程度、自分の感じたイメージで表現してもらうように依頼した。筆者は日本的な文化の特性がミックスした現代服のイメージに対して、スペイン人がどのよう

な反応を示し、独自の表現をするかを観てみたかったのである。今回は伝統的な着物に現代的な織と帯をコーディネートした。日本語を勉強している2名のスペイン人と筆者がモデルになった。そこで、イマニョール氏はスペイン人には自然で着物に似合うようなアップなどのヘアスタイルを提案した。しかもメイクアップも自然だった。それとは対照的に筆者のヘアとメイクはパンク的というかかなり極端な遊びがあるものだった。

特に重要なことはパフォーマンスにおいて、リズムカルな音楽にもかかわらず二人のスペイン人モデルは、しとやかに歩いている。それに対して筆者はリズムを付けて歩いた。後で「サビエルの絆」の映像を見ると、文化ギャップがそこに表わされていた。彼女たちはすでに日本の着物文化を理解して、あたかも日本人になりきっているようだった。

モデルを決定したのはスペイン訪問の前1週間を切っていた。送られて来たサイズ表を参考にモデルを検討したが体型の問題が生じた。ナバラ州立大学の学生を対象に大学当局に当所お願いした時、やはり日本人の体型で制作した作品に合うモデルを見つけるのは困難ということであった。今まで知り合ったスペイン人及び2004年に山口県立大学を訪問した学生たちの体型を検証してみた。日本人と比べると彼女たちはかなり放漫な胸と豊かな腰の学生が多く、返事の内容も当然かとも思えた。

実際に日本で制作している作品は、女性の場合には概ね日本サイズの9号である。中には7号のものもある。9号はスペインサイズでは38号、7号は36号である。単に号数の問題ではなく、胸囲、腰囲、ウエストなどのバランスや体の厚みなどが異なる。それ故に、発表する作品もサイズを合わせることができるよう、かなりの工夫が要求された。

筆者が縞模様のデザインをした柳井縞の着物については、サイズの融通性があり、改めて着物がもつゆとりやサイズの適応性の高さを実感することになる。また、それぞれの作品のヘアスタイルを考える時、実際の髪の長さやイメージのギャップなどもあり、この点も工夫を強いられた。

電子メールにて、パンプローナの松川女史からモデルの写真が送られてきたのは、我々が出国する直前であった。作品とモデルのイメージとの適合性、サイズとモデルの体型、ヘアスタイルのイメージとモデルの普段のヘアスタイルさらに作品の順番と前後のイメージの適合性など、いろいろな観点から考慮してモ

デルを決定した。

モデルが一人も決まっていなかった段階で、同行予定の猪又徹学長職務代理（大内義隆役）と田村洋教授（サビエル役）そして筆者はモデルに決まっていた。そして、こちらの大学からナバラ州立大学に留学している3名の学生の内、2名（川村友子、望月瞳）はモデルさらにこちらから行く学生の2名（藤田智子、依田香織）もモデルをすることに決めた。実際にファッションショーを実施するためには、裏方のスタッフが重要である。しかし、モデルに人員をとられ、裏方のスタッフは留学生1名（梶山愛）と訪問した学生3名（永富真子、神大樹、宮前恵美）となってしまった。永富は演出助手として、学部生をまとめ、本番では音響・照明室で采配を振った。

2004年のナバラ・ファッションショーでは映像を演出に組み込んでおり、今回も映像と服飾作品をうまく適合させることにした。映像の構成は山口市の紹介映像、長年のサビエルと大内に関するファッションショーの映像、さらに大内義隆とフランシスコ・サビエルとの関係およびサビエルの道を視覚化した映像から成っている。姉妹都市および姉妹大学になってまだ1年しか経っておらず、ナバラ州立大学の学生や一般市民にとっては、山口は遠い存在に違いない。それ故に、理解の一助として映像を作成したのである。

今回は筆者の研究室の大学院生である植田篤志が約5分の映像制作を担当した。筆者は映像ソースの収集をするとともに、ショーの演出の立場から映像の企画も行った。植田は山口の名所の映像を作成するばかりでなく、サビエルが通った道の世界地図をユニークな方法で視覚化している。

映像とファッションショーを一体のものとして企画したにもかかわらず、結果は分断されるものとなってしまった。現地に赴き最初に舞台監督、照明、音響そして大学関係者と打ち合わせをした時に、映像とショーの間にナバラ州立大学の学生のダンスが挿入されることになった。彼らの着替えの時間を確保するためである。信じられない提案にしばらく啞然とした。筆者の意図を伝えて交渉をしたが、彼らはすでに順番を決めてしまっており、妥協せざるを得なかった。ナバラ州立大学のミーティングも時間が迫った状態でできたことは、留学生の梶山女史から知らされていた。致し方ないとあきらめることにした。

2004年の山口県立大学主催の交流会で、ナバラ州立大学の学生グループによる民族音楽ホタの合唱と民族舞踊が公演された時のことを思い出した。山口側で多

くの催しを用意しており、お迎えしたとは言え、やはり20分～30分程度の時間を提供できただけだった。お互いに招いた人たちに自分たちの文化を紹介したいという思いが強い。しかし、皮肉なことに我々の訪問団全員が公演最後の出番のために、舞台裏で待機していたために、歓迎のパフォーマンスを入江氏制作の番組でしか見ていないのである。

4 'Yamaguchi Meets Navarra 2005'の実施

①服飾デザインとショーの構成

第一部ではモノクロームで統一された大内義隆とサビエルの作品と共に、着物を現代風にアレンジした作品と、16世紀に日本文化に大きな衝撃を与えた南蛮服飾から着想を得た作品によって構成した。ここでは、サビエルが1549年に鹿児島に辿り着き、言語も文化も異なる土地で困難な宣教の旅を続け、山口の地で大内義隆との出会った場面を演出した。山口県立大学大学院国際文化学研究科のサテライト研究室では、地域文化に由来してサビエルと大内文化に着想を得た、ファッションや生活小物の商品開発を進めてきた。今回はその作品も含めた6作品を発表した。

続いてデニムを主に用いた作品と、デニムに加え新エコロジー素材として開発が進められているバナナ繊維及び竹繊維を用いた作品、計3点を発表した。

山口県は国内でも有数のジーンズカジュアルメーカーの製造工場が多く集積している。2000年からは産学共同で「ジャパンファッションデザインコンテストIN山口」を実施し、日本文化を背景として世界にファッションを発信して行けるような人材育成を目指している。コンテストを山口で毎年催すことで、地域における経済と文化による活性化をも図っている。

ここでは、上記のファッションコンテストでの受賞作品2点と、日本の繊維技術の先端であるエコロジー繊維を用いた作品で現代の日本の繊維文化を発信したいと考えた。続いて、7月に山口県立大学大学院のサテライト研究室のある(有)ナルナセバで催された「七色粹夏」展で発表した、日本の祭りから着想を得た作品の中から4作品を発表した。これらの作品は、現代の視点からジャポニスムファッションについて考えたもので、和服の構造や装飾性のみならず、日本的な情緒や美意識を表現することで、新しい服の創造を目指したものである。

第二部では伝統的な構造を踏襲した着物3点を発表した。これらは筆者がデザインした柳井縞の創作着物である。柳井縞は山口県柳井市に江戸時代より伝わる

伝統織物である。その縞織の技術に新しい感覚が織り込まれた作品で、織手は柳井縞の会のメンバーである中川佳子女氏である。今回は、同じく伝統技術に現代的な感性を加えたデザインの足袋や帯、着物を創作している京都のデザイナーズユニット「SOU SOU」とのコラボレーションが実現した。木綿でかつ現代的な配色の柳井縞の着物に合わせる帯を探していたところ、脇阪克二氏デザインの帯に出会った。そこで脇阪氏の協力を得て、伊勢木綿の帯「月シリーズ」3点を選び筆者の着物に合わせるようになった。これらの着物作品では、伝統と現代の感覚を併せ持つ日本の日常着としての着物を提案できたのではないだろうか。

最後は竹を原料とする新繊維「爽竹」（東レ株式会社提供）を主な素材に使用した筆者の作品「竹の風」で幕を飾った。この作品は、着物の特徴である直線的な裁断と縫製により作られている。サイズの適合性がある着物の特徴を、ドレスの形態に持ち込もうとしてデザインした。ドレスは前ファスナーで後ろのバスト位置で網状に編み、サイズが調整できるようになっている。しかし、後ろのトレーンが後ろ見頃とは関係なく肩から直接床に降りることで、紐調整が見えない。しかも後ろの肩下の体部分が直接見えるので、脇から背にかけてセクシーさを表現するように考えた。モデルは177cmもある人で、着丈はぎりぎりであった。現地でニュー着物と形容されたこの服は、スペイン人が着ることで、着物とドレスの融合をしたような、新鮮な印象を与えたようである。このショーは、服飾デザインを通じて地域文化を発信することを目指しているのも、この分野に関係のある山口県内外の多くの方々の協力に支えられて成り立っている。日本の文化、特に山口を中心とするファッション文化を総合的に発信する絶好の機会であった。

②モデルと服飾表現

今回のファッションショー実現のため、制作面で苦労した点がサイズ調整である。新しいジャポニズム、そして山口ファッションの提案をコンセプトとした作品の多くは、着物の持つ調節可能という機能などを持っている。しかし、通常筆者らが制作の際、使用している人台（ボディ）は日本人の平均的な体型を基に作られているため、西洋人の体型とは大きく異なっている。そのためサイズの展開に一苦労であった。また、今回のショーでは現地の一般市民にモデル参加を呼びかけているため、体型、年齢とも多様であった。そこで、ショーの構成と同時進行で、出演を受けてくれた現地のモデル一人一人の体型を調査し、日本の工業規

格とヨーロッパ各国の工業規格を参照しながら作品の多くを作り直す必要があった。

この作品の直しでは、平面構成で作られた作品が西欧特有の体型に合わせた際、どのようなシルエットになるのか想像し難く、モデルに関する情報がないなど多くの不安を抱えながら、あらゆる角度から西欧体型の特徴を考慮しての作品の直しに取り組んだ。

パンプローナに到着し、早速モデルに試着をしてもらった時に驚いたことは、平面的な服がはっきりとした凹凸がある立体的な体にまると、服の線が強調され、予想以上に美しいシルエットが出たことだ。服の構造やデザインを学んでいる立場から、このような体験は机上では得がたい貴重なものであった。

③ファッションショーのスタッフの役割

今回のナバラ州立大学との交流は2006年に迎えるサビエル生誕500年記念イベントの一環である。そこで、我々のショーは昨年山口県立大学で行われた、ナバラ・ファッションショーを基とし、水谷由美子教授の企画・演出・構成で実施された。舞台装置は、幕と horizontals の照明の変化で空間を変えるというものであった。特に、現地スタッフの計らいで山口の提灯祭り で用いられる提灯が、舞台の両脇に掛けられているのを見て驚いた。

筆者は演出助手および舞台スタッフとしてショーのスタッフをした立場から、その活動について述べたい。ショー当日の短い時間内に17名のモデルのヘアメイク、衣装のフィッティングそしてリハーサルをもこなさなくてはならず、あらかじめ学生スタッフ同士で打ち合わせを重ね準備を行った。特に言葉が通じない点をどう克服するかが問題であった。

とはいえ、スタッフもモデルも「いいステージにしたい」、「この機会を最大限楽しみたい」という参加者共通の思いがあり、その思いを基に言葉の壁を越え、心が通じあったように思う。我々は演出図面でスペイン人モデルに懸命に説明し、彼らはそれをまた熱心に理解しようと聞き入る、そしてショーの始まる直前まで立ち位置確認をし、出演者同士練習をするなどした。ショーを直前に控えた緊張感の中でも言葉を越えた、まさに心の交流があった。

また、楽屋での準備においても、ほとんど設備がない部屋をファッションショー用のフィッティングルームにしなければならなかった。ハンガーの調達からハンガーラックを作ってもらうまで、通訳がない中で会場スタッフへお願いをした。また、本番中にはリハーサル不足を補うため、音響・照明室で指示を出さな

ければならなかった。リハーサル中にコンピューターの誤作動によりトラブルが起き、かなり興奮気味の照明家の姿を見ていたこともあり過剰な緊張があったが、留学生の梶山愛子女氏の助けを借りながら無事にショーを実施することができた。ガヤレ劇場のプロスタッフの方とも、世代や立場を越えて、心が通う交流が出来た。

今回のナバラ行きにおける第一目的はファッションショーを通じて、スペインの文化を知り相互交流するということであった。しかし、筆者は目的以上のことを経験出来たように思う。なぜなら、交流の全期間を通して徐々に参加者の意識の変化が生まれ、最終的には皆の表情に充実感や達成感が表われているのを見て取れたからである。サビエルが山口を訪れたことで築かれた山口とナバラの信頼と絆は450年を経た今日でも尚、生き続けていることを実感した。そして、この絆を受け継ぎ広めていくのが私たちの使命ではないかと考える。(②のみ文責：永富)

5 エコロジー繊維を使用した作品制作について

スペインナバラ州で行われた‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’と題したファッションショーで筆者が発表した作品は2点である。ここではエコロジー繊維を用いた作品について述べることにする。作品はブラウスとエプロンスカートで構成される。今回これらに使用した生地は、デニム、そして近年環境に配慮した繊維として開発が進められている、竹繊維「爽竹」(東レ株式会社提供)と、日清紡績で開発が進められている「バナナ繊維」である。

筆者の所属する水谷研究室では2004年からエコロジー繊維に注目し、東レ株式会社から竹繊維の提供を受け、産学共同によるデザインの実践的研究活動を進めてきた。その活動の成果と役割から、今後も継続的な活動としてグローバルな視点での地球環境問題について、ファッションデザインとそのメディア発信を通して様々な提案ができると考えている。今回、作品に竹繊維「爽竹」と「バナナ繊維」を用いることはその経過の中で着想された。

竹繊維「爽竹」については昨年度の活動を記した山口県立大学大学院論集第6号『産学・国際間共同によるデザインの実践的研究・萩開府400年記念・竹が創る21世紀事業「竹を着る — 日本&フィンランドの風 — 」&「竹MEETSフィンランドデザイン展」を事例として』(117—139頁)を参考にされたい。

もう一方の素材、バナナ繊維はバナナ・テキスタイル

・プロジェクトの一環で2000年より開発が進められた比較的新しいエコロジー繊維である。「バナナ繊維」として日清紡より商品化されている。この「バナナ繊維」は山口市宮野にPDセンターを構えるブルーウエイ株式会社の岡部泰民部長のご協力で、今回二種類の生地を提供していただくことができた。

バナナ繊維開発のきっかけとなったのは、世界129カ国もの国や地域で生産されるバナナの茎部分に関する処理問題の解決策からである。通常果実の部分を食べるバナナであるが、一本あたりの収穫量が年々減ることから、およそ2～3年で茎を根元から切るそうだ。この伐採後の茎はこれまでほとんど再利用されることなく廃棄されていた。廃棄されるバナナの茎から繊維を取り出し、他の繊維との混紡によってより衣類に適した素材へと開発が進められているのである。

このバナナ繊維は吸・放湿性が高い、軽くしなやかである、自然な嵩と独自の荒さをもつなどの特性を持つ。そのためカジュアル衣料に向いていると考えられる。

以上のように竹繊維、バナナ繊維を始め、廃棄物となるものを繊維の原料として再利用するエコロジー繊維は、綿や麻を中心とする天然の植物繊維に変わる新繊維として、その必要性と共に開発が進められている。

筆者は修士課程で環境へ配慮した服飾(ファッション)文化の創造を目的として研究活動をし、有限会社ナルナセバに設置されている大学院サテライト研究室をその発信拠点としている。これまで様々な活動と考察の中で、LOHAS(以後、ロハス)という新しい様式が現代社会の生活様式として生まれ深化していることを知った。

ロハスとはLifestyle of Health and Sustainabilityの頭文字をとった略語で、健康と自然環境の持続可能性を重視した生活様式概念である。この概念を生活に活かしている人々は同時にスローライフ志向でもあると言われる。また、情報を自分の価値観に従って選択することを元として、日々の生活の営みそのものを重視している傾向があるようだ。このようなロハス志向とそれに伴う市場の出現は、生活の中での価値基準が明確に分化されるようになったためだと考える。つまり、価値観が反映される消費行動に地球環境を踏まえた意識を持つ人々が顕著に現れ始めたと考えられる。そこで、環境に配慮したライフスタイルと意識をファッションというメディアを通して積極的に提案、発信したいと考えた。その発信の一つとしてスペインでのショーの機会が与えられたことは大きな喜びであった。

この作品（写真15）では、二側面でデザインの上での持続可能性を考えた。

まず、作品の観念としてロハス志向の人々の趣味に注目した。その多くに読書、美術鑑賞が挙げられるが、ガーデニングもその一つとして挙げられ、生活の中での創造性を大切にしている。筆者はこのガーデニングに注目し、作品のデザインにエプロン（前掛け）としての機能を備えることにし、生活創造の一つとしてガーデニングスタイルを提案したいと考えた。

また、前述のように素材にエコロジー繊維を使用することで、環境に配慮した生活スタイルの提案を試みた。そして、デザイン全体では自然が作り出す有機的で豊かな曲線を参考にした。ポケット部分のデザインを曲線的にし、労働着としてのガーデニングエプロンであるが、女性らしいデザインにした。ブラウスは、胸部より上は前身頃と後身頃を一枚に裁つシンプルなデザインにし、女性の肩の曲線に沿うように必要箇所を摘みステッチをかけた。

今回の制作においてサイズに関する課題があった。普段婦人服を基本として作品を制作する場合には日本の工業規格の9号サイズの人体を使用する。しかし、今回はスペインの一般の女性がモデルとして作品を着ることになっていたため、これらの人体による立体裁断法は使えないと判断した。また、モデルの年齢、身長、体型などおおよその目安となる情報がない上での制作となるので、アンダーウェアではボタン付け位置や肩紐でウエスト周り、裾の長さを調節可能なデザインにすることにした。

サイズに関しては現地に行き試着をすると、想定していた以上に筆者の作品が大きいことがわかった。アンダーウェアはほぼ直線裁ちにしたため、裾からウエスト周りのゆとり幅が変わらない。そのためゆとりがありすぎることで着用時に服が体にぴったりと合わないことの不安を抱かせてしまった。この作品についてはウエスト部分での調節デザインを再考するという課題が残された。また、素材を扱う上で無駄を出さないという点でも、制作研究していきたい。

ところで、山口市と姉妹都市であるナバラ州の州都、パンプローナ市は環境や再生可能なエネルギーへの関心が高い。一般にスペインは風力発電施設が多く、その発電量は環境先進国と言われるドイツに次いで2位である。パンプローナ市へ降り立つ旅客機の窓からもペルドン峠の尾根に沿って白い風力発電の羽根がゆったりと回旋しているのを目にした。今回の研究過程では、デザインの上で使用素材において新たな試みがで

き、山口地域から地球規模の課題である環境における日本の繊維文化を発信することができた。また年齢、体型を問わないデザインを考えるてがかりとなる貴重な経験となった。この実践を契機として、今後日本とスペインのファッションを通じたエコロジーという視点での交流も期待したい。

筆者個人については創作活動において環境の持続可能性という観点からエコロジー繊維を素材として用いた制作とその意義について考え、環境に配慮したファッション、そしてファッションを取り巻く環境を配慮した生活スタイルについて継続して提案していきたいと考える。（文責：永富）

6 テレビ番組「サビエルの絆」の制作と発信

この度の山口県立大学とナバラ州立大学の文化交流に同行取材し、テレビ番組を制作することが決まったのは、出発のおよそ2週間前のことだった。交流のプログラムの中心は、山口県立大学生のデザインした作品によるファッションショーをすることだと水谷教授から知らされていた。当初はこのファッションショーを綺麗に撮影すればそれで良いと思っていたが、現地に入ってナバラ州立大学の作成したパンフレットを見ると、内容は盛りだくさん。予定していた番組の時間にまとめられるのか、若干不安が過ぎた。

今回の番組づくりで基本的に盛り込まなければならないものは、パンプローナ市、ナバラ州について、ナバラ州立大学と山口県立大学との交流の歴史について、またサビエルの絆がどのように現在に生かされているかということである。それらをベースとしてファッションショーを中心とした山口県立大学とナバラ州立大学の文化交流を描かなければならない。加えてテレビ番組として視聴者に興味深く伝わるように描きたいと考えた。

パンプローナ市と山口市が姉妹都市縁組みをしたのが25年前である。それから、日本とスペインという距離はあるものの、交流は脈々と続いている。2003年11月11日に山口県とナバラ州は姉妹提携を締結した。同じく山口県立大学とナバラ州立大学が、学術文化交流協定を2003年11月13日に締結し、山口とナバラはより密接な関係となった。

筆者は15年前スペイン北部を取材したことがある。スペインとフランスのピレネー国境から、大西洋岸近くのサンチャゴ・デ・コンポステーラまで、およそ800キロを取材した。今では割と有名になっている世界遺産サンチャゴ巡礼道「カミノ・デ・サンチャゴ」を、

定かではないが、恐らく日本のテレビ局では最も早く紹介したのではないだろうか。筆者は約1ヶ月間滞在しており現地の人々との交流を通しスペイン人の気質について理解できるようになった。

15年前、パンプローナ入りしたのが6月の初旬で、街はサン・フェルミン祭の準備に追われていた。市民はこの祭りのために1年の稼ぎを使うといわれていて、特別なお祭りということは十分感じられた。有名なエンシエロ（牛追い）のための防護柵はすでに出来上がっていて、牛の走る道を柵伝いに闘牛場まで歩いてみた。距離にすれば800メートル余りで、意外に短い感じがした。

その1ヶ月後、サン・フェルミン祭の始まったパンプローナに帰ってきた。まさにヘミングウェイが形容したように、祭りは「爆発」そのものだった。この計り知れないエネルギーに驚いたものである。

今回、久しぶりにパンプローナ市を訪れたが、懐かしい中世の街並はそのままで、ナバラの人たちの気質も15年前と変わっていなかった。ただ新しい街が郊外に向かって延びていて、街が大きく発展していることが窺えた。

当時、山口市から王子尚三・瞳ご夫妻がパンプローナ近郊のタファヤという町に移住されていて、王子氏宅が取材の拠点となった。山口とサビエルの関わりは番組の中でも重要な位置を占め、内容の中核をなした。旅をしていると、いろんな発見があるもので、セニョリオ・デ・サリアというワイン醸造所にある教会の壁に、ソルボンヌに留学中だった頃の、サビエルからの自筆の手紙が大切に掛けられていた。内容は、生活費が足りなくなったので、国の両親に仕送りを依頼するものだった。今も昔も学生のすることは同じだなと微笑ましかった。

今回の交流の元になるものといえば、聖フランシスコ・サビエルの業績に他ならない。サビエルは山口に滞在して、布教活動を行ったことは勿論だが、西洋文化を山口・日本に伝え、日本文化を西洋に紹介した。裕福な家庭に生まれながら、自らの意志により東洋への布教という困難な道を選んだ彼の生き方は、現代の山口とナバラの文化交流という形で甦った。

今回ショーの行われたガヤレ劇場は、1600年代にコメディ劇場のあった場所に建設されたもので、長い歴史がある。「コメディ」と言っても、決して「お笑い」ではなく、もともと演劇全般を意味するものである。ガヤレ劇場はナバラの「第一劇場」であり、格調の高い由緒ある劇場である。この劇場に出演できることは

名誉なことであるといわれている。

スペインに入ってから、今回のショーのための準備の様子をつぶさに見て来た。衣装を入れた段ボール箱の通関のやりとり、マドリッドからパンプローナまでの輸送の手続き、モデル、メイクとの打ち合わせ、劇場のスタッフとの打ち合わせ、リハーサルと、枚挙に暇がないが、これらには全て言葉の壁が存在し、参加した学生に言わせると意志の疎通を図るのに一番苦労したようだ。

ファッションショーは、司会者ハビエル・ソラノ氏の紹介で始まった。ソラノ氏は新聞記者であり、英語も堪能ということで、サン・フェルミン祭のアナウンスもしている。驚いたことは、「今までこの街では無かったショーが始まります。それは日本のファッションショーです。」というくだりである。

ファッションショーは一般的にステージから観客の方に張り出した、ウォーキングステージがあり、ひとつの作品に観客が集中できるように配慮してあるものだが、今回はこのような由緒ある劇場に手を入れるということが不可能だったのかどうかは分からないが、通常ステージ上で、横にモデルが数人並ぶという演出であり、映像的には作品をひとつひとつ丁寧に紹介することが出来なかったことは残念である。

しかし学生たちの判断力、決断力には敬意を表する。短いリハーサル時間の中でスペイン人モデルに対する身振り手振りを交えながらの動き方のチェックは、完璧とは行かないまでもそれに近い形での演出となった。ショーが終わった後の観客の大きな拍手がそれを物語っていた。学生たちの雰囲気もスペインに到着したときとは随分様変わりした。達成感に満ちた自信は眩しく、頼もしかった。

ある食事の席で、ナバラ州立大学ペドロ・ブリヨ学長から思いがけない質問を受けた。なぜあなたたちマスコミが、山口県立大学の交流事業の取材をするのかということであった。スペインではマスコミと大学がこのように密接な関係にあることが不思議だったようである。私は、大学のやっていることはなかなか社会には伝わりにくい、そこで、そのパイプ役になるのは我々マスコミではないだろうかと答えた。

現在では多くの自治体や、教育関係、一般の市民団体での国際交流がある。今回の交流にしても、関わった人たちにはその苦労や内容が分かり合えることでも、それ以外の一般の人々には、殆ど何をやっているのかわからないだろうと思う。写真での記録はその瞬間での切り取りで、内容が伝わりにくい。しかし、動画は動

きもわかるし音声も記録できる。もうひとつのメリットはまわりの雰囲気の中で、その場の空気が伝わることである。これからの交流では、より多くの人々に知ってもらうために、スティル写真と共に、ムービーも必要な時代になっているのではないだろうか。今回はテレビ放映したことで反響もあり、大学の活動の一端を市民の皆さんに知らせることができたと思っている。

今や地方から世界へ発信することはそんなに大袈裟なことではない。「地域密着」という言葉が、どうもその地域へのサービスだと一般的に思いこんでいる節がある。大学の地域密着ということは、何も宮野の掃除をすることではない。日本や世界に向けての研究成果の発信や、相手を取り入れることが大学の存在を社会にアピールすることであろう。ファッションや、美術、音楽のようなものは世界共通の言語であり、文化である。お互いの気持ちに入り易い。ヨーロッパというところは文化に対しての奥行きが非常に深い。日本独特の古典芸能、能や狂言などもすんなり理解してしまう。この度の交流の席上、ルイス・カンポイ教育大臣のおっしゃった、「文化とは人間でいえば骨にあたる。骨が崩れたら全てがダメになる。」という言葉は重い。文化は金にならないという日本の風潮はいかがなものかと思う。

今後の山口県立大学に期待したいことは、今回の交流をきっかけとして得たナバラ州立大学やナバラ州、パンプローナ市の人脈を活用したダイナミックな交流の展開である。山口市、もっとマクロ的に見れば宮野を世界に通用する地区へと発展させて頂きたい。産業やデザインの世界でいえば、世界的なブランド「ククシュムス」社とは強い絆が出来た。これが山口市の産業振興にまで繋がれば目に見える社会貢献となり、地域で認められる山口県立大学となる。この度の交流を決して一過性のものにしてはならない。

地域が大学に対して要望することは、大学そのものが世界に発信することでその中に包括される。独立行政法人化で、厳しい大学運営が待ち受けているとは思いますが、山口の知的殿堂として今後ますます山口県立大学の存在が大きくなることを祈っている。

(文責：入江)

7 まとめ

ナバラ州立大学の関係者のご協力のご厚意に支えられて、今回のファッションショーを実施することができた。参加した学生も、身の回りの世話をしてくれた学生やモデルそしてスタッフの人々の暖かい支援によ

って、言葉の壁を越えて豊かな交流をして来ることができた。大学間の交流は始まったばかりだが、山口市とパンプローナ市の間で、25年の市民交流の実績がある。学生は、パンプローナの公園を始め街の至る所に山口の名前を発見して驚いている。筆者はかつてサン・フェルミン祭のフィールド・ワークで訪れた時、どこから来たかとカフェで尋ねられ、「山口から」と答えて、すぐに理解されて歓迎の言葉を受けた。それも一度ではない。

こうしてパンプローナ市民には姉妹都市である山口市のことはよく理解されている。ナバラの会を始め、地域市民の文化交流の実績に敬意を表したいと思う。こうした市民レベルの交流基盤の上で、大学間交流が成り立っていることも改めて理解しておく必要がある。

今回のファッションショーの実施はかつてジェットロ主催事業のミッションで、パンプローナにファッション研修で尋ねて以来、ファッション分野での正式な交流となる。ガヤレ劇場でも今までになかった分野の公演として紹介された。この言葉から必ずしも商業的ではないファッションショーを、山口で実施していることの意義について改めて考える機会となった。特に筆者の研究室では企画の着想源および作品の主題などを地域文化に求めてデザインし、作品を地域らしさを感じられる場所で発表することから、山口ファッションの発信手法を組み立てて来た。その枠組みの中で個人の作品を発信して来た。

以上のような地域らしさの表現は、現代にふさわしい新たな感受性をその地域に創出することで、人々の美意識をより豊かにできるものである。さらに、地域らしさの表現は、今回のような国際文化交流においても、オリジナリティを示すことができるのである。欧米ファッションの模倣の時代が変化し、現代ではむしろ欧米が日本のポップカルチャーと連動して日本の若者ファッションを模倣する時代に入っている。だからこそ、我々は広義には日本文化を視野に入れ、狭義には自分たちが住まう身近な地域文化を共通の着想源として、新たな地域文化を創造するために服飾文化の分野から創作をし続けて行こうと考える。

今後はサビエルと大内文化をキーワードにした従来の歴史性に根ざす文化交流のみならず、ククシュム社のM.ウルメネタ氏とのTシャツ開発プロジェクトのように、地域に根ざしつつも現代性と祝祭性が融合したような創作手法を展開して行きたいと考える。上記会社の戦略はまさに地域に根ざしたデザイン展開をコンセプトにしている。こうした手法は、あくまで

もファッション分野での一つの手法に過ぎないが、共通した価値観を持つ人々が交流先にいることは大きな希望である。

学生、市民そして教員などが渾然一体となって交流することから、新しく、山口ならではの国際文化交流を実現できるような活動が期待される。また、一元的ではない豊かな地域文化を発信し続けることが重要である。交流は始まったばかりだ。

謝辞：上記研究を実行するよう勧めて下さった岩田啓靖前山口県立大学学長、諸々の実行を支援して下さいました本廣正則事務局長始め事務局の皆様、ファッションショーに関してモデル役をかって下さった同行の猪又徹学長職務代理、さらにモデルおよび音楽監督・作曲を担当して下さいました田村洋教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。さらに、2004年に当大学に提携に来られ、今回、ナバラ州立大学での受入れの中心を担って下さったホセ・ルイス・イリアルテ・アンヘル Jose Luis Iriarte Angel 副学長以下、スタッフの皆様、さらに現地にてご協力下さった多くの方々に御礼を申し上げます。特にファッションショーに関してご協力を頂いた皆さんは以下に記載するプログラムに記名することで、御礼に代えさせていただきます。

国際文化交流における言葉の壁を乗り越える助けをして下さった山口県立大学国際交流員アルベルト・ミヤン氏に心から御礼を申し上げます。ミヤン氏には交流事業のあらゆる準備、連絡、TVプログラムのための映像資料の翻訳、さらに番組映像のスペイン語ヴァージョン制作における翻訳およびナレーションなど多大な仕事をして下さいました。

最後に本稿に映像および写真資料の提供をして下さった山口ケーブルビジョン株式会社、読売新聞社山口総局そして山口市国際交流室に御礼申し上げます。

資料1

「サビエルと大内」に着想さらたファッションショーの軌跡 (1996年～2005年)

- ①1996年 ルネサンス・山口Vol. I 「サビエル・大内時代とコンテンポラリー山口がスパーク」(山口中心商店街+魔法の屋根において)
- ②1997年 ルネサンス・山口Vol. II 「大内のコスモロジーを着る」(常栄寺雪舟庭において)
- ③1998年 ルネサンス・山口Vol. III 「サビエルの道」(山口サビエル記念聖堂、米屋町商店街+ラ・ポールにおいて)

- ④1999年 ルネサンス・山口Vol. IV 「カルメンの世界」(ばるる・プラザ山口において)
- ⑤2000年 ルネサンス・山口Vol. V 「ファッション・エクスプレスC571 — 未来への旅 —」(SL山口号車中：小郡・現新山口～津和野、徳佐駅周辺、津和野駅周辺、山口駅周辺～中心商店街、ちまきやエントランス広場において)
- ⑥2001年 ルネサンス・山口Vol. VI 「山口十境の詩」(ニューメディア山口において)
- ⑦2002年 クリスマスファッションショー Vol. I 「Exchange of Yamaguchi & Finland」(山口中心商店街、中市コミュニティホールNACにおいて)
- ⑧2003年 クリスマスファッションショー Vol. II 「Xavier by the Well in Ouchi period」(龍福寺、クリエイティブ・スペース赤れんがにおいて)
- ⑨2004年 クリスマスファッションショー Vol. III 「バスクのナバラ — 山口 MEETS ナバラ」(ちまきやエントランス広場 山口県立大学講堂において)
- ⑩2005年 クリスマスファッションショー Vol. IV 「ザ・ヤマグチファッション — ジャポニズムを越えて —」(山口市菜香亭において)

資料2

‘Yamaguchi Meets Navarra 2005’のプログラム

Programa

Desfile de moda presentado por la Universidad Prefectural de Yamaguchi (Japón)

“El encuentro entre Yamaguchi y Navarra” 2005

TEATRO GAYARRE — PAMPLONA

17 de noviembre de 2005

Presentación en DVD : “El encuentro entre

Yamaguchi y Navarra” 2005

1ª parte

Francisco Javier se encuentra con el señor feudal Ouchi : Obras inspiradas por la moda *Nanban*, muy popular en el Japón de entonces, influido por la moda occidental tras la llegada de San Francisco Javier ; Obras inspiradas por la cultura de la era del daimio Ouchi.

(1) Francisco Javier se encuentra con el señor feudal Ouchi

1. “Francisco Javier” Grupo de la profesora

Yumiko MIZUTANI

2. “Daimio Yoshitaka OUCHI” Ryoko MATSUO
- (2) Obras inspiradas por la moda *Nanban*
3. “Viento de Oriente” Yumiko MIZUTANI
4. “Estilo *Nanban*” Mako NAGATOMI
- (3) Obras inspiradas por la cultura de la era del daimio Ouchi
5. “El escudo de armas de la familia Ouchi” Tomoko FUJITA
6. “Las bellezas de la naturaleza” Kaori YODA

2ª parte

Moda de Yamaguchi inspirada en la tela vaquera y la fibra de plátano, en la historia y la cultura de Japón y en la *yanai-jima*, producto tradicional de la prefectura de Yamaguchi consistente en una composición de tejidos a rayas.

- (1) Obras confeccionadas con tela vaquera y fibra de plátano
7. “Diseños papirofléxicos” Mariko AKIYAMA
8. “Pliegues japoneses” Taiju KAMI
9. “¿Vestigios?” Mako NAGATOMI
- (2) Obras inspiradas por la cultura japonesa : el festival
10. “*Galloria* (júbilo)” Mariko AKIYAMA
11. “Silencio” Taiju KAMI
12. “La máscara de la justicia” Tomoko FUJITA
13. “El Japón estival” Megumi MIYAMAE
- (3) Nueva colección de quimonos confeccionados con telas *yanai-jima*, producto tradicional de Yanai, en la prefectura de Yamaguchi, consistente en una composición de tejidos a rayas.
14. “Quimono a rayas : versión en verde”
15. “Quimono a rayas : versión en rojo”
16. “Quimono a rayas : versión en añil”
- 14.15.16.

Diseño de las telas de los quimonos : Yumiko MIZUTANI

Producción textil : Yoshiko NAKAGAWA (Yanai-jima Society)

Diseño de las telas de los *obi* (cinturones) : Katsuji WAKISAKA (Teams Ltd., Sou Sou, Kioto)

- (4) El espíritu japonés : *yanai-jima* y materiales de bambú
17. “Viento de bambú”

Diseño : Yumiko MIZUTANI

Producción : Yasutami OKABE (Blueway Co., Ltd.)

3ª parte Final

Modelos :

Iván Asenso, Guillén Berniolles, Eduardo Estañan, Tomoko Fujita, Necane Garrués, Toru Inomata, Gema Iriate, Tomoko Kawamura, Mertxe Lasterra, Yumiko Mizutani, Hitomi Mochizuki, Blanca Oria, Miren Otermin, Ainhoa Sanjuan, Verónica Serrano, Hiroshi Tamura, Kaori Yoda

Peluquería y maquillaje :

Modelos masculinos : Peluquería Arbea (desde 1932). Estilistas : Maite Andrés, José Ángel.

Modelos femeninos : Claudia Corbán. Estilista : Imanol Soria.

Producción : Universidad Pública de Navarra y Universidad Prefectural de Yamaguchi (YPU)
Representante de la Universidad Prefectural de Yamaguchi (YPU) : Toru INOMATA, Rector interino

Planificación : Yumiko MIZUTANI - Estudio de diseño de la YPU

Dirección, composición y diseño : Yumiko MIZUTANI (profesora e investigadora de la YPU)
Música : Hiroshi TAMURA (profesor de la YPU)
Producción audiovisual : Atsushi UEDA (estudiante de posgrado de la YPU)

Cámara : Masatoshi IRIE (Yamaguchi Cable Vision Co., Ltd.)

Coordinación : Yuji ANKEI (profesor de la YPU), Hitomi Matsukawa (profesora de japonés)

Traducción : Alberto MILLÁN MARTÍN

Asistente del director : Mako Nagatomi

Asistentes : Ai Kajiyama, Megumi Miyamae, Kami Taiju

Colaboradores :

(Japón)

Yamaguchi Cable Vision Co., Ltd. Finland Airlines Teams Ltd., Sou Sou

Yanai-jima Society Blueway Co., Ltd. Sevensystem Co., Ltd. Naru Naxeva Ltd.

(España)

Kukuxumusu S.L.

資料3 交流事業の記録写真

資料3-1



写真1：入江（山口ケーブルテレビジョン）の撮影，編集，制作によるテレビ番組



写真2：ナバラ州立大学構内風景



写真3：写真左よりナバラ州立大学イリアルテ副学長とプリヨ学長，そして山口県立大学学長職務代理猪又教授

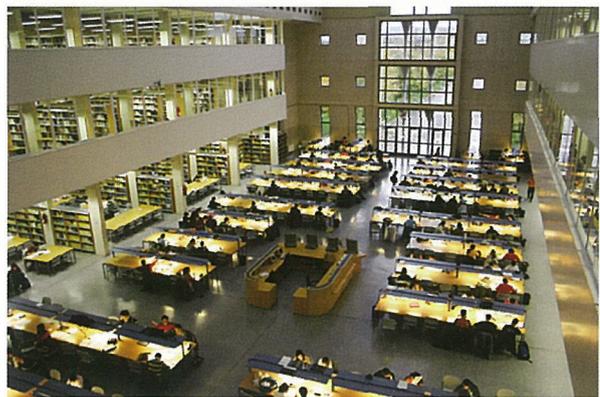


写真4：ナバラ州立大学が誇る図書館



写真5：スペインのサン・フェルミン祭の牛追いに着想を得たTシャツ製造で世界的に知られるククシュムス社



写真6：ファッションショー前の舞台スタッフとの最終打ち合わせの様子

資料：3-2



写真7：大内義隆（左：猪又教授）とフランシスコ・サビエル（右：田村教授）の出会いの場面より



写真8：南蛮服飾から着想を得た「アジアの風」（左：水谷作品）と「南蛮ブーム」（右：永富作品）



写真：9



写真10

写真9, 写真10：山口県柳井市の伝統織物柳井縞（デザイン：水谷，織：中川佳子）の着物3点と「SOU SOU」の創作帯（デザイン：脇阪克二）

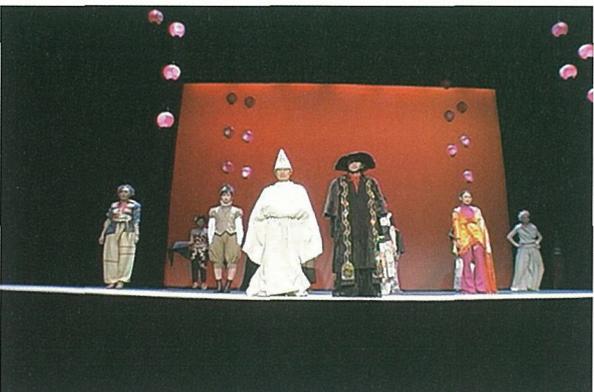


写真11：ファッションショーのフィナーレより



写真12：フィナーレで会場の観客にスペイン語で挨拶する水谷

資料 3 - 3



写真13



写真14

写真13, 写真14：山口のデニムファッション文化を発信する衣造形研究室4年生の作品



写真15：ガーデニングスタイルを提案する、バナナ繊維、竹繊維などエコロジー繊維を用いた永富による作品

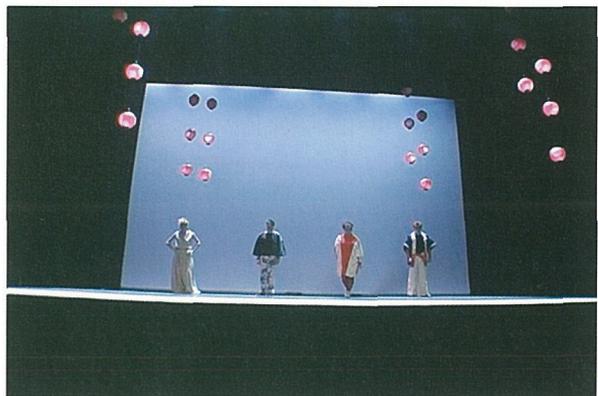


写真16：日本の祭りをテーマとした衣造形研究室4年生による作品4点



写真：17



写真：18

写真17：スペインではニュー着物と形容された竹繊維をミックスした「竹の風」(デザイン：水谷)
写真18：背中と胸部分に大内菱を配した陣羽織に着想を得たベスト
山口市の公式使節団の衣装として水谷がデザイン
2005年7月のサン・フェルミン祭での情景

写真提供
写真1～16：山口ケーブルビジョン(株)
写真17：読売新聞山口総局
写真18：山口市国際交流室